

東日本大震災を乗り越えて、
前に進もうとする三陸の人たちからの
メッセージを届けます。



「やかた」は、認知症などの高齢者を受け入れる地域密着型のグループホーム。現在、9人が居住し、小規模多機能居介護では18人が登録して、通い、泊まり、訪問で利用している。スタッフの中には震災で被災し、仮設住宅から通う人も。今後は、医療関係者などとも連携し、釜石全体で高齢者をサポートしたいと考えている。

グループホーム
小規模多機能ホーム やかた
岩手県釜石市大町3-9-16

地域の高齢者を受け入れ

松田宇善さん
たかよし

地域のお年寄りが、住み慣れた場所ですらで最後まで安心して暮らせるように……。その想いで、松田宇善さんは、釜石市の市街地に「グループホーム・小規模多機能ホームやかた」をつくった。2階建ての明るい雰囲気の建物だ。平成22年(2010)11月に着工。1週間後に引き渡しというときに、津波が街を襲った。「ほぼ完成していたのですが、1階の天井まで浸水。部屋の中には、いろいろなものが流され、積み重なっていました」と、松田さんは当時は振り返る。実家も浸水した。大切なものを奪われた悔しさと、何をどうしたらいいのかという不安を抱え、泣き

ながら片付けたという。それでも、採用していたスタッフや地域の福祉など、今後のことを考えて、前に進むと決めた。行政に相談し、建物を修繕。予定より5カ月遅れで、やかたをスタートさせた。震災後、遠くに住む子どもたちの家に身を寄せた高齢者も少なくない。しかし、環境に馴染めず釜石に戻り、やかたを終の棲家として選んだ利用者もいる。「三陸ではありがたくない『やませ』でさえ、その空気を感じるのが嬉しいというんです。海を身近に感じて生きてきた人には、やはりそういう環境がいいのでは」と話す松田さん。きょうも優しく利用者に寄り添っている。

住み慣れた街で
暮らして欲しいから

